

北海道の戸建住宅及び 集合住宅における犯罪 誘発空間の調査研究

～北欧デンマークに倣^{なら}う自然監視型住環境に向けて～



藤森 修 (ふじもり おさむ)

東海大学芸術学部建築・環境デザイン学科准教授

1969年生。94年芝浦工業大学修士課程終了。東京都内設計事務所勤務後、2000年度デンマーク政府奨学生として国立オース建築家大学に所属。03年に同大学を卒業し同国の建築家協会の会員となり戸建住宅の設計に従事。05年帰国後、北欧の建築を継続的に研究するとともに、社会のストレスが引き起こす犯罪を建築の計画によって食い止める可能性を追求している。北欧建築・デザイン協会理事、デンマーク建築家協会会員、京都造形芸術大学非常勤講師。

※写真はデンマークの新聞記事「ナチスと芸術の統合」

本研究の背景

北海道に満たない国土面積の北欧の小国デンマーク。北海道と気候・風土・文化が似通っており、ほぼ同じ人口である。デンマークの住宅地を散策すると、人間味にあふれた物語を体験するようで楽しい気分させられる。時々誰何^{すいか}されることはあるが、住人が住宅地を見守るといふ、地域を守る責任感、強い意志の表れといえよう。強盗・殺人・拉致など、近年わが国の住宅地や集合住宅での事件が多く報道されている。これらの住環境は身近で「どこでもありそうな場所」ゆえに、社会への衝撃は大きかったのではないだろうか。

筆者の北欧での生活を通して、こうした被害は建築設計の工夫によって防げるのではないかという思いを抱いてきた。両国による「建築家という職能」の違いがあるにせよ、同種の事件が北欧で生じた場合には犯罪の温床となった「都市や建築」をつくってきた建築家にも責任が問われると聞く。

わが国では「防犯」を宣伝文句とした新築物件が目立っている。首都圏に見られる防犯カメラが取り付いた「閑静な住宅街」。外部に誰の「目」も向けられないことで、通行人の体感治安を悪化させている地域も目立つ。犯罪自体が単に近隣や他の地域に「転移」するだけで根本的に問題解決しないのではないだろうか。本研究は最新のセキュリティ技術による防御法によって一時的に犯罪を抑止させる研究ではない。住人のまなざしによる「自然監視」に重点を置き犯罪誘発を退ける北欧デンマークの事例を視察し、わが国、特に近年になって「閉じた箱」のような新築戸建物件が増殖している北海道での自閉症的な傾向を鑑みることである。



残忍な犯罪現場となった国内の集合住宅の例。誰もが住人に成りすまして侵入することができる。デザインの力によって食い止めることができたはずだ。

調査・研究内容

北海道では冬の寒さが厳しいため、建築の内部の快適さを高めることに多くの努力が払われてきた。断熱効果のため北側には窓はなく、最近では敷地境界に並ぶコンテナ風の車庫が目立ち、冬は除雪された雪山とともに、見通しの悪い「死角」を生み出している状況が目立つ。住宅内部から外で起きている様子を見ることはできない「死角」エリアは、子供や若い女性が犠牲になる犯罪にも悪用される危険が予想される。



独立車庫が監視障害となる。住宅内部より通りの状況は見る事ができない。



車庫が住宅に組み込まれる良好な住宅環境（札幌）。統一されない規律でうがたれた開口部からの視線により、道路の通行人に決して空間支配の「優位性」を与えない意思表示か。多くの視線を感じながらオープンカフェのにぎわうテラスを横切るよう。

道内にも首都圏にありがちな「マンション」が増えている。住戸の設けられないマンションの低層部は、閉じた壁面となり周辺環境に死角を与えるなど問題も多い。住人が無関心な空間が増えることで、住人同士の交流もなく、部外者も誰何されずに抵抗なく紛れ込んでしまう。安易に監視カメラを設けるのではなく、床仕上げ材の変化によってどこからが住区の始まりかを強調するなど、犯罪企図者を心理的に遠ざける工夫が望まれる。



旭川市内のマンションのエントランス付近（写真左）。一列に並んだ独立倉庫が周辺からの視線をブロックしている。マンション廊下からの視線を倉庫がブロックしている開口部の例（写真右・旭川）。



開口部のない壁面が続く単調なマンションの低層部（写真左・旭川）。北海道における車社会の弊害が住人のアクティビティー^{※1}を拒絶する「無人の場所」を現実化させている。要塞のように閉じた低層部の隔壁は防犯上は必要と思われるが、犯罪企図者が乗り越えてしまうと歩道からの監視障害になるというジレンマ（写真右・旭川）。北欧では低層住戸を半階持ち上げることが一般的であった。



マンション低層部における家庭菜園の展開例（旭川）。洗練されたデザインではないものの、前面道路との隔壁は見通しの良いフェンスである。「防御」の姿勢を取らずに通行人に空間支配の「優位性」を譲っていない。



集合住宅のエレベーター周囲のスペース（旭川）。誰からも監視されず、無目的な匿名的な空間である。こうした活用されない空間は住人の監視意識も芽生えないと思われる。東京の調査の中で、同類の空間が路上生活者によって風紀を乱された事例があった。



監視カメラに守られた住宅地（旭川）。落書きした人物を特定できたという。

※1 アクティビティー（activity）
活動。行動。

提案作品の紹介

「旭川高架下学生物語」

東海大学芸術工学部藤森修研究室 山越康平作品



体感治安の悪い高架周囲を見守る役割を企図。

旭川駅周辺再開発の副産物である単調な外観と圧迫感を与える「鉄道高架下」。地元大学が連合を強める現代の傾向を鑑みて学生寮が提案された。活気ある学生のアクティビティーを宗谷線の高架下の虚無地帯に提案することで、町に彩りを与え、高架で陰る周辺環境への自然監視力を高めることを期待した。川沿いに飛ぶ単線の富良野線の高架下にはパブリックな性格の店舗、カフェ、ギャラリーなどを配し、市民が立ち寄れる機会を設けた。通常は駅務室や倉庫、駐車場などが無責任におかれる場所だが、こうした「計画されない空白」へのオルタナティブ^{※2}としてとらえている。



学生の活気あるアクティビティーが、高架によって体感治安を悪化させる周辺環境を監視するという試み。写真左は高架下の様子を示す。



色彩による高架下の環境改善例（写真左・千葉県船橋市）。
犯罪の温床となった高架周囲（写真右・東京）。

「House in Tilst Project」

設計：筆者（藤森修）

デンマーク・オーフス郊外の新興住宅地に計画した戸建住宅である。比較的治安のよい住環境であるが、新しい住宅地のためコミュニティが十分に成熟しているとはいえない。この住宅地では袋小路の採用により車の通り抜けを防いでいるものの、周囲の住人はたびたび交代しており、部外者が見分けにくい。

デンマークの戸建住宅はわが国同様、間取りの形式化により内部の状況が露呈され、おおよそのパターン化が見られる。この住宅地においても似通った家を数多く散見できる。こうした住宅は建物のつくられ方に明瞭な表・裏があり、どちらかの面は閉じた印象を与えている。角地に建つこの住宅は、隣地が小さな公園ということで不特定多数の人が関わる環境である。家の周囲から周辺環境を自然監視できるように、どの面も閉じた印象を与えない設計が試みられている。周辺環境を見守ることに責任感を持つ姿勢は建物の表面からにじみ出るのであろうか。昨年、住居侵入の被害にあった周辺住民は犯人に遭遇したことにおびえ、通報を求め駆け込んできたことがあるという。



周辺環境を自然監視する家は、建物に表・裏の表情を持たず、周辺から内部の間取りを把握させない「混乱性」を実現している。



※2 オルタナティブ (alternative)
既存のものにとってかわる新しいもの。

研究を通しての考察・展望



ゲトー化した集合住宅 デンマーク（写真左）。住棟間隔が広く、低層部の状況が監視できない。互いに監視し合う集合住宅（写真右・旭川）。計画性の欠落が思いもよらない住環境を実現。

北欧デンマークでは近年、建物の物理的な寿命には問題ないが、取り壊しが検討されていた住宅地域がある。非人間的な計画法とスケールで屹立する建造物は周囲に体感治安の悪化を引き起こしていた。犯罪の温床になったり、スラム化するなど、もはや安全で良好な住まいの環境とはいえない。デンマークの建築家は、1960年代まで無機質な大型集合住宅をつくってきたが、68年の「学生の蜂起」の影響や、国から独立した自治区である特殊な村の影響で住まいの方向性が軌道修正された経緯がある。議論と反省の末に建築家は住人の連帯感を生むような設計方法を工夫してきた。これには低層型集合住宅「キングーハウス（写真下）」（Kingo houses 1958-60）の影響が強いという。



ここには監視カメラの類は一切なく、素朴なデザイン要素と住戸の配置方法によって住人の気配を演出しながら生活が展開するという日常生活の確かさが感じられた。これは北海道でも十分に展開できる住環境の可能性であった。別のデンマークでの事例「ティンゴーン」（Housing development Tinggaarden.1 1978）においては、住棟の配置方法に加え、使用する素材と色彩の多様性により均質な工業化住宅への批判ともいえ

る「人間らしさ」を表現し、建物の表面に凹凸のデザイン要素（バルコニーや出窓等）を工夫することで「多方向」からの能動的な住人の視線で通行人を見守るとともに、注意深く部外者を自然監視していた。ここでは屋外環境を無人化させずに、遊具やベンチの巧みな配置によって「ヒューマンアクティビティ」を発生させる設計上の工夫も多々見られた。



Housing development Tinggaarden.1 1978

こうした、住環境を守ろうという住人の責任感は建築設計の結果が導いたものであったといえよう。研究を通して断定できるが、こうした環境では必ず筆者も住人に誰何されたのである。他方、デンマークにおいて「ゲトー化」している住宅環境においては、堅牢な外壁面で周囲から閉じ、住人の生活感を一切外部から感じさせないものであった。屋外においては通行人や部外者、場合によっては犯罪企図者に空間支配の優先権を与えてしまっていた。なんのためらいもなく自由に行き来できるのである。住民は防御の姿勢を死守しているだけであった。



The Tingbjerg housing scheme 1950-71
通りに対して閉鎖的な表情。筆者も危険な目に遭った。



Hoeje Gladsaxe Housing development 1963-68
人間的尺度を越えた住棟の反復。誰もが住人になりすませる。かつては理想の住環境であったという。



セキュリティゲート付きの「高級」集合住宅（写真左・東京）
幾重ものセキュリティを経た後に現れる高層マンションの共用廊下と扉の反復（写真右・東京）。隣人を拒絶し、交流を無力化させる意図か。

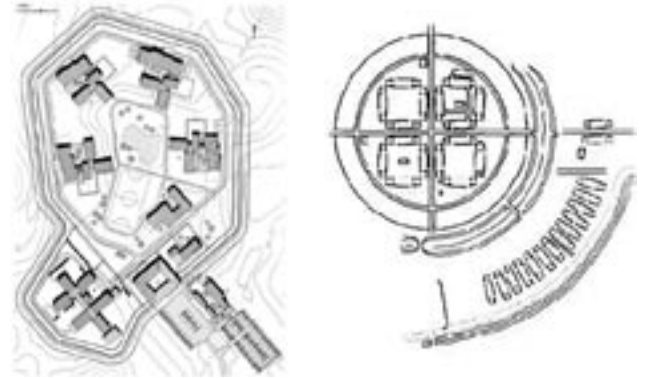
わが国では「隣人を泥棒と思え」といわんばかりの隣人疎外型マンションが増えてきている。建築空間の支配力を利用し、隣人との関係を無力化させているかのようである。北海道においても同質のマンションを多く見かけるようになってきている。



ナチスにより造られたデンマークの要塞（写真左）
開口部の少ないシンプルな家が住宅広告に目立つ。犯罪企図者が侵入できないとはいえ、周囲に死角を生み、自然監視の責任を放棄しているのではないか。（写真右・旭川）

米国で展開されている「ゲーティッド・コミュニティ」とは住区全体を塀で囲い堅牢なゲートを設置し、防犯カメラや幾重ものセキュリティに依存した住まいの様式である。住人だけに限定した安全な広場を内部に抱えている事例はわが国でも幾つか実現していた。こうした住環境では周辺環境に危険な死角を生み出している弊害が見られた。いずれ塀の外の地域に犯罪が転移するのではないだろうか。幸い道内にはまだ実現していないものの、監視カメラで守られた住宅地の事例は見られたのである。防犯機器は依存性が高いことで知られるが、本研究を進める中で、地域のコミュニティのなかで安全を守り、住人が周辺環境を守るといった義務と責任を放棄しないことが住人の幸福度を保障していることを実感した。視察しての印象だが「ゲーティッド・コミュニティ」の塀の中が生み出すものは

「住民の疎外感」ではないだろうか。そのためだろうか、皮肉なことにその姿は「刑務所」とどこか似ている。たどり着いた住まいの先にあるものは、ねじれた幸福論かもしれない。



デンマーク ホーセンス郊外の刑務所（左図）
（出所：dk ARKITEKTUR 2008-1, Arkitektens Forlag, 2009）
塀で囲われた住棟とスポーツ公園。まるでレクリエーション広場に恵まれたゲーティッドコミュニティのような構成が見られる。
バイキングの要塞都市（おおよそ1000年前）デンマーク（右図）
円形を描く土塁と堀に囲まれた内部に木造家屋4棟がペアとなって4つのグループを成している。ゲーティッド・コミュニティとの類似点も見られる。

北海道の次世代の住環境を考える場合、紋切り型マンションを批判なしに引き継いでいいのだろうか疑問が残る。トレンドだろうか、開口部の少ない要塞のような戸建住宅も展開している。過度に防犯カメラをうたうものも多いが弊害は無視できない。住宅環境を舞台とする犯罪の場合、わが国では設計者の責任が追及されないことに甘んじてはいけない。今後も同テーマでの研究や調査を継続していきたい。北欧・デンマークとの共通点が見られる北海道において、東京の病理を道内に持ち込まないでほしいと考えているからである。



Sandbakken housing complex, 1988-90
（出所：Jutland Architecture Guide, The Danish Architectural Press, 2002）
住区全体を幾つかのグループに分類することで、住人同士の交流を促進させる集合住宅（デンマーク）。筆者は視察の際、誰何された。